

異文化交流実践を授業へフィードバック

浮葉正親・田中京子

I. 基礎セミナー A (前期)

■「韓流ドラマから『パッチギ』まで一日韓比較文化論のすすめ」(浮葉正親)

1. 授業のねらい

日本人にとって、韓国は「似ている」ようでどこかが「違う」、ちょっと気になる国である。この授業では、日本人が韓国の社会や文化のどこに違和感を抱くのかを吟味し、韓国という〈鏡〉に映った日本人の自画像を議論していく。また、日本と韓国(朝鮮半島)との歴史的な深い関係についても理解を深め、日本を東アジア漢文化圏のなかに位置付ける、広い視野を獲得するのがこの授業のねらいである。

2. 受講者及び講師

受講生は文系・理系5学部の1年生12名であり、全員が日本人学生であった。TAは、国際言語文化研究科D1の金愷智さんをお願いした。また、講師として金栄大さんを迎え、朝鮮学校の教育について講演してもらった。

3. 授業内容・スケジュール

3-1 スケジュール

- 4/19 オリエンテーション
- 4/26 日本人と韓国人、どこが違うの?
- 5/10 日本人の韓国体験記を読む
- 5/17 激しい受験競争と母の祈り
- 5/24 現代に生きる儒教精神 -- 韓国に嫁いだ日本人花嫁の葛藤
- 6/14 「朝鮮学校って、どんなところ?」(講師: 金栄大氏)
- 6/21 在日コリアンと日本社会 -- 映画「パッチ

ギ」とその背景

- 6/28 発表準備〈グループ分け〉
- 7/5 発表準備
- 7/12 韓国に関して調べたことを発表する (1)
- 7/19 韓国に関して調べたことを発表する (2)

3-2 グループ発表のテーマ

- グループ1: 韓国の受験戦争
- グループ2: 韓国の食文化
- グループ3: 韓国のパワー
- グループ4: 竹島問題

4. 評価

受講生の多くは、韓流の影響で特定の俳優や歌手、ドラマに対する知識はあるものの、隣国の人々の日常生活についてはほとんど何も知らない。そんな学生たちの関心を引きつけるために、前半はさまざまなビデオを見せながら授業を進めた。昨年度の終了時のアンケートに「韓国人と話す時間がもっとあればよかった」と言う意見があり、今年度は3人の韓国人留学生にボランティアを頼み、授業に出てもらった。

また、この授業のもう一つのねらいは在日コリアンに対して関心を持ってもらうことである。そのため、今年度も愛知朝鮮中高級学校の卒業生である金栄大さんと李潤和さんを講師に迎え、朝鮮高校のカリキュラムや教材について紹介してもらった。また、豊明市にある愛知朝鮮中高級学校の公開授業に2名の学生が参加した。

反省点としては、せっかくボランティアとして参加してもらった韓国人学生たちとの交流が思ったよりも深まらなかったことである。グループ活動でも、インターネットで調べたことをまとめただけであり、韓国人学生を活用する場面がほとんどなかった。

韓国について調べるといいうグループ活動は今年度で終りにし、来年度は在日コリアン問題を中心に授業を

組み立て、グループ活動もその内容に即して行うようにしたい。

■「英語で学ぶ日本の文化」(田中京子)

Learn Japanese Culture in English

1. 授業のねらい

日本文化について学び、伝統文化に実際に触れることによって、自分なりの見解を持ちそれを英語を使用して説明できるようにする。

日本文化といってもその捉え方は様々であるが、この授業では特に、日本の伝統文化として語られることが多い華道、書道、舞踊、折り紙などをとりあげる。その姿や心を学び、専門家の協力を得ながら実際に体験し、理解する。英語を使用しながら、日本文化について自分なりに説明できるようになることをめざす。

2. 受講者及び講師

受講生は文系・理系4学部の1年生12名、(留学生1名、日本人学生11名)であった。TAは国際開発研究科博士前期課程2年のEulalia Vasconcelosさんに、また留学生センターアドバイジング・カウンセリング部門相談員の柴垣さんにも毎回参加してもらい、合計15名で進めた。1名が1回病欠ただけで、出席率は高かった。

3. 授業内容・スケジュール

	Date	Topic	Activity & Instructor	Homework
1	April 19	Introduction	Introduction of the course and members	Draw o describe your image of the Japanese culture.
2	April 26	What is the Japanese culture?	Sharing each one's drawing	Reading
3	May 10	Kado 華道	Practice 岡田佳恵先生	Essay writing
4	May 17		Presentation & Discussion	Reading
5	May 24	Nichibu 日本舞踊 【Gym No. 4】	Practice 瑞鳳豊依先生	Essay writing
6	May 31		Presentation & Discussion	Reading
7	June 14	Origami 折り紙	Practice 国際交流 白ゆり会	Essay writing
8	June 21		Presentation & Discussion	Reading

9	June 23*	To be chosen from 3 activities	Flower Exhibition, Yoki-so Event, Earthquake Seminar, etc.	Essay writing
10	June 28	Kimono 着物	Practice 加藤かつ子先生	Essay writing
11	July 5		Presentation & Discussion	Reading
12	July 12	Preparation for Presentation	Decide the groups Decide the topics	Group work
13	July*	Preparation for Presentation	Each group will prepare for the presentation.	Group work
14	July 19	Presentation	Open Session on Campus	Term Paper
15	Aug. 2	Deadline of Term Paper Submission	Details will be announced later.	

4. 評価

4-1 授業と公開実習の連携

今年度も日本文化に関するワークショップと連携講座とした(3年目)。教養教育院および留学生支援事業経費から専門講師謝金を支出した。日本人も含めた学部生たちが、留学生たちと共に実習を経験する、という、理想的な環境を持つことができた。

実習の後の授業では、各学生が調査したことを持ち寄って考察・分析した。グループで、ひとつの概念マップを作り、それを発表することによって全員と共有するという形にした。また、15回の授業のうち1回を、学外での日本文化研修にあてた。中日いけばな芸術展、揚輝荘での国際交流会、国際交流会館での防災セミナーのうちいずれかに参加しレポートを書いて提出するという形で、これらのイベントにはスタッフも可能なものに参加した。日程的に都合がつかない学生には別途レポート課題を出した。

4-2 英語による授業環境

最初に“World Englishes”の考え方を紹介し、学生たちには、持てる言語運用力を駆使して、場に合わせ助け合いながらコミュニケーションすることを促した。授業中は、一人の教師対学生という関係でなく、スタッフ3名も多様な英語で多様な考え方を分かち合うようにし、学生たちが間違いを恐れず発言できる環境作りを工夫した。学生たちの英語習得レベルは、ほとんどが入学試験対策レベルであったが、それをコミュニケーションの中で活用する場を提供できたと考えている。また、隔週で英語のレポートを提出する必要があったため、よい訓練となった。

4-3 日本文化の考察

実習後の話し合いの中では、それぞれの芸能や芸術について各自が調べたことを話し合い、マップを作製するという作業を通して、文化への考察を掘り下げるようにしてきた。伝統文化を毎日の生活とも結び付けて考えることで、当たり前だと思っていた自分の文化や異文化について新たな視点を持ち、発信する機会となった。

4-4 公開発表

学生12名が3つのグループに分かれ、日本の文化について調べ、考察したことを、短く英語で紹介した。公開発表会とし、TAが司会を務めた。

発表テーマ: Events of the Seasons/Questions about the Japanese People's Life-style/National Character Seen from Ofuro

クラス外からの参加者はなかったものの、自分たちが調べたことを15名のクラスの中で、英語で発信する経験となった。

II. 教養科目「留学生と日本—異文化を通しての日本理解—」(代表: 浮葉正親)

1. 授業のねらい

外国人留学生と日本人学生が討論や協同作業を通じて、両者の日本に対する理解と相互の理解を深めることを目的とする。名古屋大学内およびこの地域で異なる文化を持つ人々が共に学び生きることの意味を考え直し、多文化共生のあり方を模索する。

2. 受講者及び講師

学部生は12名。学部別内訳は、文学部2、教育学部1、法学部3、経済学部1、情報文化学部1、理学部1、工学部2、医学部保健学科1であった。これに10月に渡日した日本語・日本文化研修生19名(インドネシア3、ブラジル2、中国2、インド2、ベトナム2、ウクライナ2、韓国1、オーストリア1、ハンガリー1、ウズベキスタン1、モンゴル1)、短期交換留学生1名(韓国)、日韓共同理工系留学生7名、計39名が受

講した。

平成24(2012)年度は、浮葉正親(代表)、田中京子、松浦まち子、坂野尚美、田所真生子の5名がこの科目を担当した。また、岩城奈巳が1コマを担当した。授業内容と担当は以下のとおりである。

3. 授業内容

3-1 スケジュール及び担当者

- 10/1 オリエンテーション(1)(全員)
 - 10/15 オリエンテーション(2)(全員)
 - 10/22 留学生と日本社会(松浦)
 - 10/29 異文化との出逢い(田中)
 - 11/5 グループ活動について(浮葉)
 - 11/12 グループ発表準備(全員)*
 - 11/19 グループ発表準備(全員)
 - 11/26 グループ発表と討論(全員)
 - 12/3 グループ発表と討論(全員)
 - 12/10 グループ発表と討論(全員)
 - 12/17 グループ活動から学ぶ(坂野)、レポート提出について
 - 1/9 留学経験から日本を考える(岩城)
 - 1/21 まとめ
- *1コマ分(90分)グループによる自主学習を課した

3-2 グループ発表のテーマ

- グループ1: 日本の若者のファッション
- グループ2: 贈り物
- グループ3: 日本人の季節感
- グループ4: スキンシップ
- グループ5: 日本料理のいまむかし
- グループ6: ちょっと、いつか

4. 評価

昨年に引き続き、グループ活動に対する評価を重視し、全体の40%(発表30%+自己評価10%)とした。その他は、レポート30%、出席15%、クラス討論への参加度15%(10%は自己評価とした)である。グループ発表に対する評価は、五つの評価項目を作り、教員による評価を15%、他の学生による評価を15%とした。結果的には、どのグループも積極的に発表に取り組み、26~27%を獲得した。発表のなかにはインタビューやア

ンケートによる調査の結果をパワーポイントにまとめたグループも多く、全体に工夫が感じられた。レポートについては、レポートの採点基準や採点方法について再検討しなければならないと感じている。

以下は、最終日に学生たちが提出したアンケートの自由記述の抜粋である。

★文化や価値観が違っても、理解しようとすればお互いの気持ちを伝え合えるんだなと思えました。この機会を活かしてこれからも海外の人脈を増やしていきたいと思います。今のうちに異文化交流することができて本当によかったです。偏見や思い込みが気づかないところであったり、日本のことでも気づいていなかったことを考えるきっかけになりました。

★一番感じたことは、留学生は楽しそうに見えることです。異国の地である日本に来て、カルチャーショックなどでかなりストレスを感じているはずだと思うのですが、そんな中でも、留学生同士、留学生と日本人学生が仲良くしている姿は本当に素晴らしいことなんだと実感しました。この講義を通して得られたことは、今まで私が見たことのない日本の姿でした。自分が知らなかった／気づかなかった日本の良さや悪さを教えてもらい、感謝しています。

★一回も会ったことのない国の人としゃべることでもできたし、日本に対する私の考え方を日本人の学生や外国の学生たちと分かち合うことができて良かったと思います。また、日本だけでなく他の国へ留学をしたいと強く思うようになりました。(留学生)

Ⅲ. 大学院授業「異文化コミュニケーション論 a/b」: 国際言語文化研究科 多元文化専攻メディア プロフェSSIONALコース (担当教員: 田中京子)

2003年度に国際言語文化研究科日本語文化専攻で開講した科目「異文化接触とコミュニケーション」を、現在は同研究科の国際多元文化専攻メディアプロフェSSIONALコースで「異文化コミュニケーション論」として継続開講し、2010年度からは前期と後期と分けての開講になった。異文化コミュニケーションの理論と実践を核として少人数セミナー形式の授業を進めた。

1. 授業のねらい

母語や背景となる文化が異なる人たちが、意思疎通をはかりながら共に生活しようとする時、どんな創造や衝突があるか、特に非本質主義の見地から、文献購読や経験学習、討論を通して考え学ぶ。

コースの中では、共通言語として主に英語を使用し、話し合いや実習を行うことによって、言語能力が様々な人たちの間のコミュニケーションの特徴を実体験し、積極的に公平なコミュニケーションについて考察する。

2. 参加者

前期は国際言語文化研究科の大学院生中心に9名、後期は同研究科と国際開発研究科の大学院生たち10名で授業を進めた。出身地域はインドネシア、中国、日本、ヨーロッパであり、大半の学生が日本語の運用能力が高かったため、少数の日本語初級者と共に授業を進めていくにあたっての工夫が必要であった。

TAは前期は昨年度からの継続で文学研究科ラトナヤケ・ディルクシさんが、後期はディルクシさんの修了に伴って新規で同研究科ストラム・ステファンさんが担当した。授業の構成や進め方について意見交換しながら共にコースを運営し、教員にとってもよい学習の機会となった。TAは出席・宿題確認等の事務補助と共に、授業の一部を受け持ち、学生が提出するレポートにコメントし、最終レポートの採点についても補助をした。内容へのコメントは勿論だが、日本語母語話者が日本語で書いたレポートに対して非母語話者であるTAが語彙や表現の添削も入れながらコメントできること自体、学習者たちにとってよい経験であり、今後の大きな糧になったと思う。

3. 授業内容

【前期】

- (1) 異文化間コミュニケーションに関する疑似体験学習
- (2) 異文化接触の事例とその考察
- (3) 異文化コミュニケーション理論 (文献購読: 宿題)
- (4) 文献についてのレポート (宿題, 英語で執筆)

- (5) 文献についての討論
- (6) 期末レポート（事例解釈）

【後期】

- (1) 異文化コミュニケーション理論の続き
- (2) 異文化接触の事例とその考察
- (3) 事例検討論文

前期は名古屋大学情報基盤センターが運営する授業支援 Web システムを初めて利用して学生と TA, 教員間の連絡をとることを試みた。不慣れなこともあり、連絡の掲載に手間取ったり、提出されたはずの宿題が見られなかったり、掲載したはずの教材が見えなかったり、というような不備もあり、効率的なはずのシステムを十分に使いこなすことができなかった。後期はまた紙媒体の資料を利用し、学生との連絡は授業内ですべて行なうようにした。

また、一昨年度の学生たちが中心になった作成した事例検討集を、授業の中で利用するようにした。既に検討された事例について、さらに発展させて独自の考察・分析をすることをめざした。

受講生以外の大学院生の参加も得て宗教（イスラム教、キリスト教、ヒンズー教、仏教）の教えによる価値観について発表・討論の機会を持ったり、千種生涯学習センターの受講生たちと外国人の人権についての連携講座を行なったりもした。

4. 評価・課題

教員は国際交流関連業務や留学生相談の中で培われる異文化コミュニケーションに関する経験や知識を、個別教育（相談）だけでなく授業の中でも生かすべく、この授業にとり組んでいる。また反対方向に、この授業を個別教育に還元して相談活動を発展させることも意識している。個別教育と集団教育、教育と研究の接点として、それぞれの内容をさらに深めていきたい。

昨年度から、非本質主義的に文化を捉えるという視点を入れながら内容を組み立てており、今年度もこの視点を持ちながら、基本的な異文化コミュニケーションの知識も押さえることができるよう心がけた。

また、これまで英語を主な使用言語としてきたが、後期からはさらに多言語の視点も入れるようにし、日本語でスライドを投影しながら英語で発表をするというような新たな試みも取り入れた。英語をゆるやかな軸とした異文化コミュニケーションから、多言語文化をより強く意識した異文化コミュニケーションへと舵をきるための転換点として、興味深い試みとなった。この授業の10年間の変遷を考察して論文にまとめる予定である。

今後も新たな時代の知見を取り入れ、国内外の教員・専門家たちと情報・意見交換をし、教育と研究の双方向の活性化をはかりたい。